

●漁の村 翻弄される漁民たち

田中雅一

●西海岸漁村の歴史

スリランカは日本と同じ島国であり、さまざまな漁法が発達している。しかし、仏教の殺生にたいする否定的な考えやカースト（漁民）の制約などから、漁業は必ずしも十分な発展を遂げてきたとはいえない。主要タンパク源として魚を重視してきたにもかかわらず、その機械化は進まず、生産高は期待通りにはのびなかった。

まず西海岸の歴史的な発展について紹介し、さらに一九八四年以後激しくなったスリランカ北部と東部の民族紛争（武装闘争）が西海岸だけでなく南海岸のシンハラ漁民たちにどのような影響を与えることになったかを論じることにはしたい。

スリランカ西岸部および南部は、一六世紀に香料を求めてやってきたポルトガルやオランダによって最初に植民地化された地域であり、スリランカの中でも早くから

商品経済の影響を受けてきた。紅茶やゴムに続いて英国によって導入された換金作物のココヤシは、一九世紀後半スリランカ西部において作付面積が急激に拡大する。チラウを中心としてネゴンボ、プッタラム、クルネーガラの三地点を結ぶ地域はココナツ・トライアングルとよばれ、スリランカのココヤシの主要生産地であり、耕地の九割近くがココヤシ園で占められている。ココヤシ園の拡大によって、一八世紀にはジャングル地帯でたくさんさんのゾウが生息していたとされるこの地域の経済は急変する。

漁業に関して言えば、一九世紀後半になると、チラウ周辺の漁村から干し魚がコロンボに運ばれて、売られていた。一九世紀末には、チラウの南に位置するトドゥウエーワから船で鮮魚がコロンボに運ばれたという記録がある。また内陸部八〇キロメートルのところに位置する

クルネーガラにも運ばれている。

二〇世紀になると、陸路が完備されていく。一九二一年にバスが走るようになり、一六年にはチラウまで汽車が走る。さらに、今世紀初頭に氷が導入され、鮮魚の運搬条件が格段に整う。一七年にはマンナールに製氷工場がつくられる。

今日地曳網や機械化船でとれた魚の多くが、コロンボの卸売り市場へとトラックで運ばれている。また Teppan とよばれる小型の筏いかだや小型のモーターボートによってとられた魚は、小売業者によって内陸部の農村へと売られていく。

交通網の発達によって人の往来が簡単になった。一八〇六年には東北海岸にあるムッラッティエーヴにネゴンボ出身の漁民が移民してきたという記録が残っている。

こうした移民は西から東へというだけでなく、同じ西海岸においても人口の密集地であったネゴンボからチラウ周辺あるいはブッタラム周辺の海岸への移民も認められた。チラウからブッタラムにかけて散在する漁村の多くは、こうした移民漁民が定着することによって生まれたものである。

宗教的には、西岸部の漁民の多くが一六世紀にポルトガル人によって強制的に改宗させられたカトリックである。カトリックであるということが、この地域の漁民たちのあり方を特徴的なものとしている点についても留意しなければならない。また、彼らの多くは本来タミル語を母語とするタミル系のカトリックである。現在彼らはみずからをシンハラ人とみなしているが、老人たちはタミル語をよく理解している。これにたいして南の方は、圧倒的にシンハラシンハラの仏教徒が多数を占める。

●タミルの村シャッティユール

さてここでは西海岸では珍しいヒンドゥー・タミルの村シャッティユールを紹介しよう。西海岸の多くの村がそうであるように、シャッティユールもまたインドからの移民によって一七世紀半ばに生まれた村である。記録でみる限り、二〇世紀初頭にはすでに地曳網漁が主要な漁法となっていた。網元たちが村の有力者となり、同じ村人を網子として雇う。かつては共同出資をして網子が同時に網元であるような形態もあったようだが、戦後地曳網漁が利潤の高い漁法であることが明らかになると、地曳網漁が投資の対象となり、資本家としての網元とそ

の下で働く網子との二極化が生じた。

地曳網漁はモンスーンによって大きく左右される。西海岸では、四月から一〇月にかけて吹く南西モンスーンのため海が荒れ、地曳網の操業を続行することは不可能だ。このため網子の多くは東海岸のムッライツティールヴヤトリンコマリイ周辺で操業する地曳網の下で働く。村の生活はモンスーンの変化に応じて一年が二つの漁期に分かれるのである。

村人たちはいつ頃から東海岸で漁を続けることになったのだろうか。かつては村の東側に広がる潟での漁や北のカルペティヤ半島の東で小規模な漁をしてきた。だが、交通網が発達して移動が楽になると、網子の中には東海岸に移動し、そこで操業していた地元の地曳網で働きはじめる者が出てきた。一九五〇年代のことである。

その後、村人の中に資本をつくって地曳網を東海岸で操業する者が出てきた。記録によれば一九五〇年代末のことだ。操業する網の数が三〇までに限られている村の漁場と異なり、漁民人口の少ない東海岸では漁場を獲得するのはそれほど困難ではなかった。彼らは村人たちを網子として雇い、漁を始めた。こうして新興の網元たち

が、七〇年代に村で操業する網元の数を上回り、新たな有力者層を形成することになったのである。

他方、政府が促進する漁業の機械化は、適当な港がないシャッティユールではなかなか進まなかったが、浜辺に乗り上げることが容易な二人乗りのモーターボートが一九七〇年代末に若者を中心に普及しはじめた。これは強化プラスチック製の船体と、一三馬力や一五馬力の船外エンジンをつけた小型のモーターボート（正式には三七・五フィート型ボート）である。この種のボートがスリランカに導入されたのは、六〇年代の初期である。ボート漁を始めるにあたっては、まとまった資金や銀行からの融資を受けるために、地方の政治家の推薦が必要である。またたとえ購入をして操業にこぎつけても、燃費がかさみ、エンジン・トラブルも生じるため、必ずしも成功を保証するものではない。にもかかわらず筏漁に比べれば、行動範囲も広く、積むことのできる刺し網の長さも二倍近くあり、水揚げははるかに大きい。また技術的にも、同じ刺し網で漁をする筏よりも取り扱いが簡単である。

こうして伝統的な網元を中心とする体制は新たな網元

とボートの所有者によって徐々に崩れることになったのである。しかし、シャッティユールではまだ地曳網漁が健在である。他の地域で地曳網漁が大型漁船の普及に押され急速に衰退しているのに比べると、変化は緩慢と言えよう。

●民族問題に翻弄される村人

シャッティユールは、少数民族のタミル人が圧倒的多数を占める。タミル人である彼らは、一九八〇年代に急速に悪化した民族関係に大きく翻弄^{ほんろう}されてきた。まず教育条件が悪化し、高等教育を受けることや公務員への就職が困難になったこと、タミルの村だということで舗装道路、電気や水道などのインフラの整備が遅れたことなどをあげることができる。そして多くの若者が八三年のコロンボでのタミル人虐殺を境にスリランカを離れ、ドイツやスイスなどのヨーロッパ諸国へと渡っていった。また若者の中には分離独立を主張する武装集団の呼びかけに応じてインドに渡り、武装闘争の訓練を受けた者もいる。しかし、シャッティユールは幸か不幸かタミルの武装集団が主張するタミルの領土に含まれていない。換言すれば、彼らが独立を叫ぶことは、村を捨てること

を意味するのである。回りをシンハラ人に囲まれているシャッティユールの人びとにとって、村を捨てずに独立を試みようとするのは、はるかに非現実的なことである。しかしながら、たとえ彼らがシンハラ政府の支持を主張したところで、タミル人という民族の属性を払拭^{はうしき}できるわけではない。

実際、独立を支援する若者も村にはいたし、大半の村人にとって北部で政府軍に苦しめられ、また戦っているタミル人たちを他人事とは思わなかったはずだ。いっぽう政府側からみれば、コロンボに近いシャッティユールはコロンボの要人をねらうテロ活動の前線基地として利用される可能性を捨てきれなかった。このため一九八〇年代末には、警察官が常駐するようになった。回りを鉄条網で囲ったバラックに八〇名近くが駐在する。交番というよりは、潜在的に反政府的なタミル人を見張り、威嚇^{お化}するための施設だ。

一九八四年になると、北部や東部は政府軍とタミルの国（イーラム）独立を目指す武装集団、とくにタミル・イーラム解放の虎（LTTE）との恒常的な戦闘状態に入った。このため、移動先の北東部の海岸は危険地域と



地曳網漁。



東海岸でのひととき。



戦死者の墓標。

なり、実質的に従来の移動地での漁を放棄することになった。東海岸に保管されていた網や船が破壊された。政府軍によって攻撃されただけではない。若者たちはLTEたちからの勧誘も恐れていた。そして、安全な場所に移動したり、移動をあきらめる者もいた。

移動地が制約されるということは、資源に限りのある特定の地域に漁民が数多く集まり、漁民たちの間での競争が激化することを意味する。また女性たちが働いていたジャフナの塩田も閉鎖された。このように漁民たちの

受けた被害は、はかりしれないものがある。インドから武器を漁船で調達するLTE側への輸送手段を断つために、漁に出ることが禁じられている北部の漁民よりはましたが、西海岸や南海岸に住む漁民たちの生活も不安定なものとなり貧窮している。

こうした問題の解決策の一つとして注目されているのが、西海岸に発達しているラグーンや河口部で近年盛んになってきたエビ養殖である。エビ養殖は漁業に比べると、安定した収入をもたらす経済活動である。外国資本

の参入も手伝って、西岸部では主として日本への輸出を目的としたエビ養殖業が急増している。

東北部への移動が制限されたのは、タミル人だけではない。シンハラ人たちも、LTTEの攻撃を恐れて東北部への移動を見合わせるようになった。以下では彼らの語りをいくつか紹介したい。

●南部の漁村

コロンボから南へ五〇キロに位置するドダンドウワは、二〇〇〇世帯の大きな漁村だ。ここの七五％が漁民だという。小さな魚売りのスタンドの近くにいた壮年の漁師から話を聞いた。

彼によると、一九八五年までポットヴィル、エラヴァーなど東の町に行っていた。そこでは地曳網の網子として働いた場合もあれば、同じ村出身の船主の大型船に乗ったこともあった。八六年に三人の網元がLTTEに殺された。ほうほうのていでジャングルに逃げこみ、警察にかけ込んだ。警察は彼らにすぐ村に戻るように命じたので、ここに帰ってきた。今はゴールを拠点として船で漁に出る。三人乗りの船で、毎日戻ってくる。当分は東海岸に移動することはない。

ゴールからそれほど遠くないカタルワでは、元漁民が話をしてくれた。

彼はエラヴァールに行っていたが、一九八三年夏にLTTEの攻撃を受けて帰ってきた。LTTEに襲われたとき、小型のモーターボートなどをとられたが、村人三人とジャングルに逃げこんでなんとか助かった。翌日ポロナルワまで歩き、そこからバスに乗って帰ってきた。LTTEが現れたときは、逃げたりしないで、言うがままにご飯や魚を与えた者もいた。しかし、網元自身はなんとか逃げおおせたが、彼の家族全員が殺された。隣に住んでいたウェリガマ村出身の人も一人まきぞえをくって殺された。タミルの漁民はわれわれを助けようとした。

このためこの漁民たちはLTTEからも攻撃を受け、またシンハラ政府軍からも攻撃された。漁民同士はうまくいっていた。民族紛争などなければ、エラヴァールに三月から一〇月まで滞在している。村に逃げ帰ってきたが、それ以来漁をするのもやめてしまった。今は小さな商売をやっている。同じ村の人も、もう東海岸には行かずにオフシーズンのときミリッサやゴールに出て働く。

さらに南に位置するキリンダでは二人の漁師から話を

聞いた。

一人の漁民は一九六〇年代から八三年まで東海岸のトリンコマリとバッティカロアに行っていた。向こうでは延縄漁と地曳網漁をしていた。直接の被害はなかったが、たまたまこちらに戻ってきたとき、他のところで家が焼かれたり殺されたりしたという話を聞いて、行くのをやめた。

また別の漁師はトリンコマリには一九八三年から八七年まで行っていたという。一九八七年にLTTEの仕掛けた爆弾で友人が殺されたので、トリンコマリでの滞在を切り上げ、村に戻ってきた。今はキリンダを拠点としている。

被害にあったのは漁師だけではない。魚の買い付けに來ている商人もまた、いちじるしい被害を被っている。

あるシンハラの人によると、彼は一九八三年から八八年までバッティカロアで魚を購入していた。八八年にタミル人の運搬するバンで魚を運んでいると、LTTEの三人に止められた。彼らは手榴弾とピストルをもっていった。車はとられ、離れた漁村に連れて行かれた。LTTEたちは車でどこかに行ってしまった、一四歳くらいの若

い戦士が一人彼を見張った。その村にはイスラームの老人がいて、網を修理していた。紅茶を出してもらったが、これから殺されるのかと思うととても飲む気持ちはなかった。一緒に連れてこられたタミルの運搬手が、彼を殺すなら先に自分を殺せと言ってくれた。結局イスラームの老人がどこからか帰ってきたゲリラたちを説き伏せ、無事に返すように言った。バンで近くの町まで送ってくれた。

●リゾート・ホテルの陰で

一九九四年から九五五年にかけて、スリランカの西岸部から南端まで駆け足で巡ってきた。砂浜が広がる海岸にはリゾート・ホテルが建ち並び、こんなところにあると思うような場所でも、ホテルさえあれば外国人客に会うことができた。民族紛争の激化に伴い、外国人観光客が激減したが、それも一時的なものだったのだろうか。しかし、ここで述べたことから明らかなように、リゾート・ホテルの脇の浜辺で漁をする漁民たちの生活は、この一〇年間で大きく変化した。そして、ときおり見かけた真っ青な海を背景にして立つ若き兵士たちの真新しい墓標こそこの国の苦悩を象徴しているようだった。